

# 生理慾望と教育

—(4)—

排泄と教育

加藤常吉



先ず、第一に考えたい点は、本項で取り上げたい「排泄」とは慾望のかたちでながめるといふ点である。このながめかたは、排泄を単に生理機能の現象にとどめるものではないし、また人間社会の生活現象にとどめようとするものでもないといふことである。それは明らかに、人間と一個の有機体としてながめ、この有機体のうちに意識される排泄が、生活面でどんな風に人格構成に影響するかをとらえようとするものである。そしてそこには、正しく教育価値を見出すことができるというわけである。本稿で、はこんでゆこうとする。論旨のねらいは、そこにあるのである。

## 一、排泄の生理的意義

生理面からながめられる排泄には、大体三種をあげることができる。すなわち、排便、排尿、発汗である。このうち第三の発汗は、排泄する物質が、第二の排尿と非帯によく似ているもの

であるが、生理機能の活動からいうと非常なちがひのあるものであり、且つ生理慾望としてとり上げるのには、すこし不適當であるので、本稿ではこれをはぶく。

**排便** 排便の生理的特ちよりは、これが消化器系統に属すことは周知の通りである。前稿の飢えの慾望の箇所ですでに述べたところであるが、食物が小腸、大腸内できるとなまされる消化によつてたくさん残渣ができるわけである。これが次第に大腸の下部におくるとどけられる。残渣の水分は大部分大腸内で吸収されてしまつており、大腸内で分泌されてた多くの粘液、また残渣のはつこうや、腐敗作用によつて発生した臭気などがそれに混じつてゐる。この物質が不潔で、しかも有機体にとつて有害であることは言うまでもない。それが生理機能の作用によつて肛門から体外に排泄されるものである。

**排尿** 排尿は身体機構の系統からい

うと、排便とよほど性質がちがつてゐる。それは主として、身体の代謝作用にともなつておこるものである。身体内でできた蛋白質の分解物、また、腸内で蛋白質がふはいし、それから体内に吸収解毒された不要な物質が主な材料となつて尿のつくられる過程をたどるものである。その外、体内でできた異常物質(有機体の存続に役立たない)、また体内にあやまつて入つた同種の物質などは、凡て同じような過程をたどつて、体外に運びだされる準備をとるものである。

右の理論からも判るように、尿のできる材料とは、すべて血液からうけるもので、その大部分が血漿から分離されるものである。したがつて、その構成の要素も、血液のあるものをのぞいたそれに、非常に近いものといふことができる。その持ちようは、両者とくらべると、尿は水分が多く、膠質が皆無で塩分、尿素が多いといふことにな

尿排泄の機能についていうと、腎盂に集つた尿が、次第に腎盂内にたまる

と、腎盂に収し、起つて、尿を輸尿管内におくられる。この収縮が、蠕動となつてあらわれるので、尿は輸尿管から更に膀胱におくり込まれる。膀胱の膈は、たてよこの筋からなるもので、これを排尿筋とよんでいる。また膀胱から尿道にうつるところに、二種の括約筋がある。その一つは平滑筋からできてゐる内膀胱括約筋であり、いま一つは、それより下部にあつて横紋筋からできてゐる尿道括約筋である。

有機体の有続に不要な尿は、右にのべたこれらの尿排泄の機能のはたらきによつて、適當時機に体外に排泄される。

## 二、排泄の意識

生理慾望の教育の立場から、意識の問題は相当大きく浮び上る。なぜならば、人間が社会生活の面で、これに統制を加え、また調整をおこなう後に当

るのが、外でもないこの意識だからである。

排泄の意識作用とはどのようなものであるか。糞塊が直腸に相当量たまると、直腸壁にある求心性神経を刺激する。この求心性衝げきは、後にのべる排泄の反射運動をおこすものであるが同時に大脳におくりとゞけられる。こゝで便宜をもよろしくする。有機体である人体からながめるならば、必要であるだけでなく、有害な糞塊が重苦しく直腸にとどまつてゐるその感覚は不快であるのみならず、それから医やされたい慾望となつてあらわれるものである。便宜はこの役割をはたすものであり、したがつて慾望の意味とあらわすものである。

排便の場合の意識はまた、有意的なものであるだけに、生活環境が排便の好適条件になつておらないときは、排便をおこなわない役にもあたる。それは、直腸と肛門の括約筋のゆるみを抑制するものである。

排尿の場合も、同じ理くつで説くことができる。膀胱に尿がたまると、膀胱壁にうける圧進は、求心性の神経をはたらかせて大腸につたえられる。こうして尿意の感覚をおこすものである。

右に述べた感覚が慾望のかたちとなつてはたらくことは、排便の場合と同じであるし、また、社会生活の面で抑制の役目をはたすことと、排便の例と同じ理くつで説くことができるものである。これに当る機能は、前者が直腸と肛門の括約筋であつたのに対して、後者は膀胱と尿道の括約筋があたるものである。

### 三、排泄の慾望とリズム

排泄の慾望が、リズムの法則にもとずいて活動する状態は、極めて明りよりにながめられる。その法則とは、飢えの慾望の例でみたと同じように、第一は、排泄がおこなわれて、満足と平安の気もちがもちつけられていると

きである。第二は、排泄物が体内にだん／＼とちく積されてきて、これを排泄する必要を感じだしてきているとまでである。このときは、第一でもちつづけられていた満足と平安の気もちは失しなわれて、これに代る不安感がつづてくる。そして、排泄を欲しくする。排泄にともなう不安感は、排泄物が体内にちく積されなくとも、おこる例がある。それについては、排泄の不適應な行為として後にとりあげることにする。第三は、体内にちく積された排泄物が排泄されたときで、このときは言うまでもなく、第二の過程で感じられていた不安定は解消される。

排泄リズムの法則について、とくにとり上げたいところは、これが社会生活と深いむすびつきをもつという点である。すなわち、人は排泄にともなう不安定から解消されることを必要としていること勿論であるが、これが、社会生活でどの時刻に遂行するのが適当かということである。この適当さは

かられるかどうかは、人の社会生活を好都合におこなうことができるかどうかをきめることになるので、教育の面から非常に大切な条件となる。

排尿の社会生活の適当時間については前稿でのべたブラツツのセントヂオーヂ、スクール（年齢二才から五才まで）の例をあげれば、

午前九時（子供が登校して授業につ

く直前）

午前一〇時半—一時（果汁又はト

マト汁をのむ直前）

午後一二時半—二時四五分（昼食

後で、午睡に入る直前）

午後二時半—二時四五分（下校直前）

この学校では、家庭にかえつた子供の排泄時間を、左のようにのぞんで、協力をもとめている。

午前七時—排便、排尿（起床直後）

午後四時五〇分（入浴直前）

午後六時五〇分（就寝直前）

### 四、生来的反応とその変化

排泄できる生理慾望が、社会生活で教育活動としてとり上げられる大きな理由は、この「生来相反」とその変化にあるのである。

(一)排泄の生来的反応 排泄の行動が有機体の生命を持續するのに不可欠なものである限り、人の誕生時からおこなわれることも亦事實である。人の誕生時の排泄の持ちようとは、無意の、かたちをおこなわれているもので、この時期の排泄作用は、便であつても、尿であつても、反射作用によつておこなわれるので、神経活動の中心となるものは、生理的な刺激である。すなわち排便の例では、直腸壁に加わる圧迫によつて、求心性の神経を刺激して、反射的に直腸の収縮と肛門の括約筋のゆるみがおこることによつて、これがおこなわれ、また、排尿では右の反射運動は膀胱の収縮と、他面、膀胱を尿道の括約筋のゆるみによつておこなわれるものである。

生来的反応の持ちようは、それが天

与の生活活動であつて、学習または教育を必要としないということである。ゆえに、これは非文化的また非社会的な生活態度であるといえる。同時に、進歩のないものである。

(二)生来的反応の変化したものの排泄の行動が、社会生活の面で様々な制ちをうけることは言うまでもない。人が社会人として育つてゆく場合、この制ちうは当然うけなければならぬことである。それには教育が必要であることは言うまでもない。そこで、この教育が、とくに生理慾望の面からどうとり上げられるかとながめてゆくのか、この項の内容である。

(1)排泄の教育の可能な年齢その他の

条件

今日までの多くの幼児の教育の書によく書かれていたことであるが、幼児がおむつを濡らさなくなるために、極く幼い頃から排泄の習慣をつけることが必要であるというのである。いま一つは、濡れたおむつを速やかに変えてゆ

くことであるといわれた。つまり、おむつが濡れない頃を見計らつては、臀部を外気にさらして、「ウン」なり「シーツ」なりのかけ声をかけてやつて、排泄を外でおこなう慣れしをつけさせるというのである。

ところが、生理学者であるブラッツ教授は言う、右にのべた類の訓練は、子供が少くとも満六ヶ月に達しないかぎり、無意味なものであると、というのは、子供はこの年齢に達しなければ自意で排泄行動を支配するから、換言すれば、これを排便の例で説けば、外部からあたえる聲の刺激によつて、直腸に求心性神経のしりょう撃をおこしてこれを大脳につたえ、便意を催させる能力を、もち合せておらないというのである。結局、排泄の訓練をはじめられる年齢とは、満六ヶ月からということになる。

次に、社会生活で、排泄は場所によつては屢々抑制しなければならないときがある。この可能な生理的条件はど

うであろうか。つまり、がまんのできる科学的基礎である。これを排尿について、がまんのでき時間とは、これを幼児の排尿についていえば、前掲したように、大体二時間若しくは二時間半が正常である。この時間とは、幼児の年齢でいうと、膀胱に約五〇cc（二勺半）の尿のたまるときである。大人の場合、これは二〇〇ccに相当する。この時機に、尿意をもようするものである。

尤も、膀胱は伸縮力にとむもので、身体のおたくまつているとき、精神の平安なときには、伸びがきく。この好条件は睡眠中である。この時期には、幼児であつても一〇〇cc位の量にたえられるのは、普通のことである。

#### (四) 排泄行動の社會面に於ける注意

社會生活で注意されなければならない排泄の行動は次の二点である。そしてこの二点は教育の對象となるものである。

#### 衛生の觀念 排泄物が有機体として

有害なものであり、且つ不潔なものであることは、すでに述べたが、人の群がつている社會生活に於ては排泄は一定の、しかも衛生設備のととのつた箇所でおこなわなければならない。この条件にあてはまるものは、便所であり、排泄後のフラッシュ（水流し）であり場所をよごさないことであり、また手を洗うことである。洋式であると、右のべたうちフラッシュと手を洗うことは、徹底して衛生の目的をはたしている。とくに、手は石けんを用いて洗つている。日本の手洗いは、たら／＼つと水の落ちる水桶の下で、ほこの指さきだけを濡らすのもつて事足らしているのがある。これは観念的な手洗いで、衛生の目的を達しておらなく。とくに、日本では、回虫、ぎよう虫などの寄生虫の卵が、排便からばい介される例が非常に多いので、よろしく、水を多量に用い、石鹼を用い、場所によつては消毒液を用いる、実用的手洗いにあらためたい。この習慣を是非幼

い時代からつきたいのである。教育はこの衛生目的をはしりたい。

**性の觀念** 排泄は男女とも直接性器に関わりをもつものである。ゆえに、文明社會では排便の箇所とは隠れた場所があてられ、また公衆用の便所では両性が分れているのが普通である。社會人はこの用法にならうのが当然である。とくに、文化の高いと思われる國家社會（例えば、アメリカ）では、男子が女子の公衆便所に入るようなことがあれば、銃殺してもよろしい、という習わしすらあるので、そのような社會では、この種律すらまもらなければならない。これが教育目的にあげられる。

**排泄の行動** 排泄の教育を遂行するのに、子供の排泄の行動が、年齢に応じてどう発達してゆくかの基準を知ることが大切な条件となる。それについての、フラッシュの極く大まかな調査は 満二才—大人の手伝を完全に必要と

満三才—パンツの後のボタンの手伝  
を必要とし

満五才—完全に独立できる  
ことになつてゐる。

## 五、セント・デオーチ・ スクール教育

さて、こゝで前稿であげた、ブラッ  
ツの指導するセント、デオーチ、スク  
ールで排泄の教育をどう実際にどうし  
てゐるかを紹介しよう。

右の学校が、生理慾望の教育に當つ  
てゐることは、前にのべた通りである  
が、以下の諸点を右の観点からながめ  
ると興味多いものといえよう。

**第一は、排泄の機能を、子供の社会、  
生活に即応できるものとする**ことであ  
る。排泄は、ときと場所とによつての  
み許されるものである。子供は、これ  
以外に対しては、抑制しなければなら  
ない。この場合にはたらく生理機能と  
は、排尿の場合は、尿道の随意筋をゆ  
るめないであることである。幼児時代

でも極度の抑制でないかぎり可能であ  
る。

**第二は、規則正しい時間をおいた排  
泄の習慣をうちたてる**ことである。こ  
れは社会生活で必要事である。前述し  
たように、セント・デオーチ・スクー  
ルで二時間乃至二時間半の時間をおい  
て排尿の訓練をしてゐるのはこれがた  
めである。これも直接は膀胱の訓練と  
いうことにある。

**第三は、排泄行動の独立**である。前  
述もしたように、排泄の行動は一定の  
年齢にもとづいて發達するものである  
。この独立をはかる。これは行動の  
独立と同時に、生活態度の独立を意味  
するものである。

右のような教育目的を果すために、  
セント・デオーチ・スクールでは左の  
ような表を用いてゐる。

## 六、排泄の不適応行為

**抑制のできないもの** 子供がもの事  
に非常におびえた場合、つまり、感性

のてん倒をきたしたような場合、反射  
的に膀胱に収縮をきたして、排尿する  
ようなことがある。いわゆる「そらう」  
がそれである。この種の「そらう」を  
意味をもつて抑制することは不可能で  
ある。ゆえに、この種の「そらう」に  
対して、叱つたり、体罰を加えてたし  
なめることは生理条件に反する。

**不安や心配が原因したもの** 右にの  
べた事情ほどではなく、不安があつた  
ら、心配をすると、身体は全体にきん  
張するので、膀胱が除々にではあるが  
収縮する。したがつて、尿意をもよお  
す。よく、子供が叱られたとき、また  
新入児童が排尿をうづたえることがあ  
る。これは、不安にもとづいて、膀胱  
が収縮してきたよい例である。このよ  
うなときは、当然排尿を許してやらな  
ければならないし、また、不安をとり  
除いてやらなければならぬ。

**愛情をとり戻そうとして** フロイド  
学派の人たちが屢々引用する例に、幼  
い子供の下に赤子が生れて、母親の愛

排泄の記録

子供名 ( ) ※110

日	時間	曜	+か-	日	便	尿		便											
						火	曜	月	水	曜	日	木	曜	日	金	曜	日		
日課	9.00	-	-				a	-				a	-						
	10.30	+	-				b	+				b	+						
	12.30	-	-				c	+				c	+						
	2.30	+	-				d	+				d	+						
命令で	11.30	+	-				11.30	+				9.30 から 9.45	+			9.45	+		
自発的に																			
無意識に																			
排 便																			
自発的に																			
無意識に																			

※ この子供の年齢は、2歳八ヶ月

が赤子に向けられると、その幼い子供はお寝小をする。これは母親の赤子に向けられてしまつた愛情を、とり戻そうとする願望が潜在意識となり、これが睡眠中又はゆめではたらいで、その幼い子供を赤子にさせ、母親の愛情の

はたらきかけを、彼に向けさせようとするに外ならないと。この種の「そら」は母親の眞の愛情が、そらがれてはじめて、その姿を消す。  
場に応じられない 子供が便所に馴れないとき、或は日本の便所のように

下が見えて恐ろしさが感じられるとき或は非常によごれておるようなとき、排泄をこばむことがある。この種の不適応行為は、場からくる原因をとり除いてやることである。

(25頁より続く)——ことを感じ、文部

省建築モデルスクール候補校の指定を通い、昭和二十七年五月名古屋市立第三幼稚園ほか七園を指定して、実家と建築家が一体となつて実際に研究調査する対象とし今後幼稚園を増設したり改造する場合の資料を提供するものとした。

昭和二十七年五月一日の実態調査の結果によると、公立幼稚園だけでも幼稚園基準の最低必要面積に達するまでには、まだ三七、〇〇六坪を要し、現在ある園舎の中にも建築基準法第一〇条によつて使用禁止命令を受けた危険園舎及び禁止は受けないがこれと同程度のものとあわせて六、〇三六坪もある。ここで指導を受けている幼児は五、七五〇人もいるが、これらの幼児は毎日々々生命の安全をおびやかされながら生

活している。

## 五

かねてから園長や教諭のよき相談相手となるために、指導主事が一堂に会して研究協議したいとの要望があつたが、昭和二十八年三月、二、三、四日の三日間その第一回が行なわれた。

以上の現状から幼稚園教育のすう勢はおのずからうかがえると思うが、次第に、幼稚園教育の認識がたかまつてきている。幼稚園に入園を希望する幼児が急激に増加してきている。幼稚園を計画的に増設しようとしてきている。教育内容や指導法を系統的に研究しようとしてきている。教員の充実と質的向上を図ろうとしている。施設設備を最も教育効果があるように、しかも

経費のかからないようにしようと研究しはじめてきていること等は、明らかである。

これらは何れも一日もはやく解決されるよう、幼稚園関係者が努力されることを望んでやまない。(文部事務官)